

「ESD銀河リポート」の発刊にあたって

大学教育総合センター長 玉 真之介

「学びの銀河」プロジェクト

岩手大学が平成18年度現代GPに採択された「持続可能な社会のための教養教育の再構築：『学びの銀河』プロジェクト」は、国連「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development : ESD）の10年」を大学として積極的に受けとめて、本学の教養教育にESDを織り込んでいくことによって、教養教育を「21世紀型市民」育成のためのカリキュラムに再構築していくことを目指しています。

国連「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」は、世界192カ国の首脳が集まってヨハネスブルクで開催された2002年の持続可能な開発のための世界首脳会議（ヨハネスブルク・サミット）で日本が提案し、同年の国連総会で日本を代表とする46カ国により提案され採択されたものです。

それゆえ日本は、世界の中でESDを推進していく責任を負っています。軍事力や経済力ではなく、教育という分野で世界をリードすることは、日本が21世紀の「国際社会で名譽ある地位」を占める上で、戦略的な重要性を持つと考えられます。

世界の大学におけるESD

しかるに、我が国の大学はESDに対してきわめて感度が鈍いように思われます。目を世界に転ずると、The Association of University Leaders for Sustainable Future (ULSF)に世界の3百を超える大学が加盟し、10年以上前から教育研究並びに大学の行う事業にサステナビリティの観点を取り入れています。また、ヨーロッパには、コペルニクス・キャンパスという大学連合が「持続可能な開発のための大学憲章」に基づいて、大学の教育研究や事業に取り組んでいます。

そして、ヨハネスブルクサミットを期に、ULSFとコペルニクス・キャンパスは、ユネスコを含めて、Global Higher Education for Sustainable Partnership : GHESPを立ち上げて、「ESDの10年」に取り組んでいます。さらに、もっと刺激的なのは、イギリスです。イギリスでは、「大学生に持続可能性リテラシー(sustainability literacy)をコア能力として涵養することを最優先事項」とする取組が国家戦略として進められています。

日本の大学改革の問題点

北米やヨーロッパの大学が本格的にESDに取組はじめたのは、1992年のリオデジャネイロで開催された地球サミットからです。実際、そこで採択されたアジェンダ21の第36章こそ、ESDをはじめて明確に打ち出したものでした。これに対して日本は、その前年の1991年に大学設置基準が大綱化され、以後、教養部の廃止に象徴されるような大学改革の時代に入りました。それは、大学に対する規制を緩和して経営の自主性を高め、各大学における教育課程、教育方法の高度化・多様化・個性化を促すものでした。

1998年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」も、21世紀を「流動的で複雑化した不透明な時代」とし、大学の課題は課題探求能力の育成であると

して、単位制度の実質化などの教育の質の向上を強調しました。それにより、シラバスの作成や授業評価の導入などの教育方法について大きな進展がみられましたが、肝心の何を教えるかについては、副題の「競争的環境の下で個性輝く大学」が示すように、各大学がそれぞれに考えるものとして多様化、個性化が一段と強められたのでした。

2001 年に小泉政権が誕生すると、規制緩和の動きは国立大学の法人化へと加速し、少子化による受験生の減少が拍車をかけて、各大学の間で多様化、個性化をめぐる競争は一段と激しくなりました。そこでは、高等教育が共通に取り組むべき普遍的、人類的な課題の提起や、それを政策的に方向付ける基盤的資金の充実もなく、重点的資源配分という名で大学間競争が促進されたのでした。

「大学とは何か」

これに対しイギリスのブレア政権は、サッチャー政権の自由化路線が格差社会を作り出した反省に立って、公教育の充実へと政策を転換させ、年率 4.4% の増加により、10 年間で教育予算を倍増させました（山口二郎『ブレア時代のイギリス』岩波新書）。それだけではなく、大学生にサステナブル・リタラシーをコア能力として涵養することを国家の戦略目標として政策的に進めています。

それに比べると日本では、大学関係者の多くが未だ ESD という言葉すら知らない状態が続いている。ただし、変化の兆しは見られます。この間の中央教育審議会が、教養教育の重要性を強調しはじめたことです。とりわけ、2005 年の「我が国の高等教育の将来像」は、「度重なる規制改革の中での『大学とは何か』という概念の希薄化、他の先進諸国に比べて必ずしも十分とは言えない経済的基盤など、むしろ、我が国の高等教育は危機に瀕している」と述べ、また「今後の学士課程教育は、『21 世紀型市民』の育成・充実を共通の目標として念頭に置きつつ」と、「共通の目標」に言及しました。

そこで問題となるのが、「21 世紀型市民」とは何か、という問いです。中教審答申は、「専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ」社会を支え、社会を改善していく人材としていますが、未だきわめて抽象的です。

「ESD 銀河リポート」

岩手大学は、1992 年の地球サミット、2002 年のヨハネスブルクサミット、そして国連「ESD の 10 年」が提起している ESD こそ、その総合性と実践性の 2 点において「21 世紀型市民」の育成に不可欠なものと確信し、「学びの銀河」プロジェクトを開始しました。この「ESD 銀河リポート」は、ESD 銀河セミナーでの講演や、調査活動で得られた ESD に関わる様々な知見や情報を収録して、ESD に関心を持つ大学関係者に提供するためのものです。それを通じて、日本の大学の中に ESD の輪を広げていきたいと考えています。

2007 年 2 月 10 日